

## 第10回認知リハビリテーション研究会からの報告

加藤元一郎  
東京歯科大学市川総合病院

平成12年11月11日、慶応義塾大学病院において、第10回認知リハビリテーション研究会が開催された。今回の研究会では、演題数が19に増加し、午前9時から午後6時半までの間、熱心な議論が行われ、ややハードスケジュールであった。以下には、そこで発表された演題がプロシーディングズの形で掲載されている。

本年の研究会では、まず、高次脳機能障害の評価とそのケアに関する演題が発表された。この分野は最近注目をあびている重要な領域であり、精力的かつ詳細な報告が行われた。次のセッションは、記憶障害に関するものであり、代償戦略、グループ訓練、人名学習、展望記憶訓練、遂行記憶訓練と記憶のリハの関連について、活発な報告が行われた。記憶障害のリハビリテーションは、刺激法の限界を踏まえた上で、代償法、領域特異的な学習、前頭葉機能障害と記憶訓練との関連、そしてダイナミックなグループ療法へと、多彩な展開を見せていることがわかる。次のセッションは、動作・行為障害の訓練に関するものであり、運動イメージの利用、前頭葉障害と生活能力、道具の強迫的使用に対する訓練、変性疾患の失書、術前リハビリテーションに関する発表が紹介された。動作、行為、行動のリハビリテーションには、現在のところ、この方法でやろうという基本的なセオリーがない。多くの試行錯誤が必要であるとともに、今後非常に興味を持たれる分野であろう。午後からは、注意障害に関する訓練についての報告が、ミニシンポジウムの形式で行われた。まず、Balint 症候群の注意障害が発表され、その後作業能力の安定性の問題、注意障害の在宅訓練、重症のUSN のケースの訓練、最後に前頭葉損傷によるUSN の訓練に関する報告が続いた。全体としては、注意障害に対する直接刺激法の効果がまず確認されたといつてよいであろう。しかし、各演題は、注意障害のさまざまな側面にフォーカスを当て、これに対する訓練を取り上げており、単なる刺激法の効果を評価するというより、むしろ刺激法の改変ないしは更なる広がりを目指しているかに見える。今後の発展が期待される。

レクチャーでは、百瀬クリニックの田中裕先生による「失語症と半側空間無視の認知薬物療法—レビューと新たな挑戦」と題する講演が行われた。先生自身が苦心して集められたデータに基づいたユニークかつ刺激的な講演であった。特に注目されたのは、失語症に対するコリン系作動薬の効果とUSN に対するドーパミン系作動薬の効果であり、認知薬物療法の今後の発展が予感された。

午後1時からの教育セミナーでは、慶応義塾大学文学部の梅田聡先生の「し忘れと行為の企図について—展望記憶からの分析」と題する講演が行われた。非常にわかりやすいまだ斬新な講演であり、予定された行為の記憶である展望記憶という視点から、行為の障害の説明が行われ、また画像研究の結果も紹介された。行為と記憶の関連に興味をもつ臨床家や研究者にとっては、この本に収められた総説は必読と思われる。